

大地

8号
S 56. 9. 25
真宗大谷派
浄国寺 (23) 5724

前住職様の旅立に想う

上越市皆口 飯塚 信治

前お住職様の帰りに旅立された事について、生前のありし日の一端と、お葬式に参列しましたの感想を寄稿してみました。

お住職様には長い間の病氣療養中のところ、先般世話人会の節、最近病氣重体との事を聞き案じておりました。去る五月二十三日お逝去の報を知らされまして急ぎ参りました。変り果てたお姿を見て、唯々手を合わせ、お冥福を祈るのみでした。

二十六日お葬式当日には、申し合わせの時間迄に朝六時のバスにてお手伝いと参りました。私も桑取地区世話人として行きました。故二ノ宮勝治さんの後を受けて日も浅く、他の世話人の皆様との面識も少なく、式の順序も個

人の場合と違い何もわからず、お手伝いもせず皆様に申し分けなかつたと思います。

お葬式の式場を見まして、お遺族の皆様や壇家の皆様方で多勢の方々が参列されることだろうと想像はして居りましたが、寺院の皆様、一般会葬者や各団体の代表者等の多勢の皆様が参列されていることに驚きました。これもお住職様が生前寺役のお忙しい中、社会のために奉仕、指導等の教えに専念されましたあらわれであります。尚、檀家の個々の人々には、お住職様から、あたたかい思いや、深く教えられた事を聞き、お逝去を悔みます。

今思い浮かぶ事は、昭和三十年頃であったと思いますが、秋の廻禮にお出下されました時に、足利豊文さん（神職二級神官）が同席され、お住職様と仏教の教えに於ける「彼岸」という事についての会話に余念なく、とうとう半日過ぎました。私はその席で聞いており、お住職様の仏教についての修養と勉強の深さを知り、教えられた事沢山ありました。

素描（スケッチ）

はつあき ひかり 山崎 隆 昌
初秋の陽光 窓より入りて

えん ひなた 白き逆光 まぶし
縁 日向

庭畑に 百日草 黄菊 サルビア

ひまわり 向日葵 後れ咲き 火の神の踊る

吹く風に 秋草細身くねらせ

木々の葉 揺るぎつぶやく

おきなご 幼児二人 庭池の淵にしやがみ

赤箱のビスケット 鯉に投げ入る

いづくより 蟬の鳴き声

しずかなり 初秋の 昼下り

父と大地

山崎隆昌

八月二十二日夕方、父の骨は極く近しい人達の手に依って墓に納められました。

その日は台風が日本に接近したため、昼頃より風雨が強く「今日は納骨するの無理かな」と感じるような天候でした。御堂で『阿弥陀經』を読み、玄關より夕闇の外へ出ると雨が止んでおりました。生前父は「私は天候に恵まれていたんだ」と冗談に自慢していたものですが、そのことを想い出して苦笑させられました。

父の白い骨は、カサカサと乾いた小さな音をたてておりました。それは『白骨となれる身』というよりも『白い華』を想わされ、箸ではさむと、花びらが風に舞うように、フワフワと何処かに飛び散ってしまひそうでした。

生前父と「生命」を共にした仲間、妻、子供達、兄弟、従兄等の人達によって、我家の苔むした小さな墓の底に父の骨は一つ一つ納められました。すっかり暗くなつた中で、ろうそくの灯が僅かな光

を与え、それは覚悟はしていたものの、さびしく悲しいものでした。父の納骨の時、しきりに頭の中に浮かんで来たことは『大地』ということでした。足下に無限に広がる『大地』ということでした。父はこの『大地』という言葉が好きで、しばしば語ってあります。この寺報も『大地』であります。父は寺報第一号で大地について、祖父の歌を引用しながら次のように述べております。

○土筆 生きむ願ひのひとすじに
大地を割りて、伸び出にけり
I 中略 I どんな雪の多い年でも裏の
もみじの木の下に、つくしが二本、
三本、五本、十本と、次から次へと
むらがって出て来ます。やわらかな、みずみずしい
莖をしたつくしが、春を待ちかねて、
生きたい願ひひとすじに、大地を割
って伸び出てくるのを、わが身と一
つに思う。
I 中略 I 元来、人の心と大地を母と
する自然は美しいなあと思う。I 以下
略 I (生きる喜び)
父にとって、大地は人の心と等しい
ものであり、自然は、人の心と大地を
母とするものでありました。海、山、
川、荒野、田畑、全て

のものを恵む大地は、生命の故郷でありましよう。全ての生命は母なる大地から生まれ、大地に還って行くのでありましよう。宗祖は「一。親らんは父母の孝養のためとて一遍にても念仏まをしたる」と未だ候ず、その故は、一切の有情は皆もて世々生々の父母、兄弟なりI略I(歎異鈔)と述べておられますが、生命の重さとその共有性を大地が全てに与えてくれるように思うのです。

父は自然が好きでした。父の亡くなつた五月二十三日、庭はつじの花が満開でした。その一本一本は、町の植木屋さんから買ってきたものではなく、山から取ってきて植えたもの、小さなさし木から育てたもの等々です。想うに、父にとつて花の美しさもさることながら、その中に息づく生命を共にすることが大切であつたように思います。庭も形より自然が生きている庭が気に入りのようでした。毎朝散歩しながら、でぬ声で木々と、池に泳ぐ鯉とさえざる鳥と語り合っていたように想うのです。父の生命は、今は、深い大地の中で

報 恩 講

如来大悲の恩得は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
ほねをくだきても謝すべし

(正像末 和讃)

十一月二十八日は宗祖親らん聖
人の御命日であります。その日を
前後として、全国の浄土真宗の門
徒、同朋の方々は「報恩講」を営
みます。

浄国寺でも、別記のように、来
る十一月一日(日)に行なり予定
です。ぜひ皆様御参集下さい。
教育者林竹二は次のように述べ
ております。

「授業というものは一定の決まっ
たことを教えることではない。教
科書を教えるのが教師の任務では
ない。教材を道具に使って、子供
のなかにある非常に見つけにくい
見つけてもそれが何かがわかりが
たい、かけがえのない「たから」
子供が教育の対象であるかぎり、
それぞれ持っている「たから」を
深めていく作業だということを教
師たちには非考えてもらいたいと思
います」(教えること学ぶこと)

今、ここではどんな子供達のな
かにもあるかけがえのない「たか
ら」を見つけたことが述べられ
ておりますが同時に、これは私達
一人一人の問題であると思えます。
私達自身の中にあるかけがえの
ない「たから」とは何でしょうか。
金でもない、地位でもない、力で
もない、かけがえのない「たから
」、生命の「たから」とは、
宗祖親らん聖人は、そのことを
私達に明らかにしてくれるのが、
如来の大悲、師主の知識であると
いわれました。

しかし、残念であります。す
ぐに「その通りですね」と素直に
うなずけぬものが私自身の中にあ
ることをかくせません。一方では、
生かされている私を自覚する
時、その歓びを感じ、有難いなあ
と思えます。

「報恩講」は、「生かされる私」
「かけがえのない、たから」をも
っている私を明らかにしてくれ
るものへの願いと感謝の会と思
います。ぜひ皆様お誘い合わせて参
詣下さい。

報 恩 講
十一月一日(日) 十時より
法話 堀前恵、或師(五智光源寺住)
職・俳人

得 度

父が亡くなって二ヶ月余の八月
四日、長男の隆史と若坊守の慎子
が京都で得度を受けました。

得度は、仏に帰依し、仏門に入
り、僧籍を得ることあります。
浄国寺という浄土真宗の門法の
場に縁を得て生活する二人にとり
まして、得度を受けることは自か
らの中にけじめを与えるものであ
りましょう。(長男は九才でまだ
ほとんど判っておりません。)

二人にとって父の死はとても大
きな意味を持っておりまして、
父が生きているに「そのことだけ
で、生活することに安心感があっ
たように思います。

父に得度の報告が出来ないこと
を、残念に思います。

得度のこととは、檀信徒の皆様
ご相談すべきかも知れませんが、
たが、庫裡の改築、父の葬式等、
いろいろあり、檀信徒の方々に
い分お世話になったこと、そして
何よりも、二人の意志で得度を受
けるというところで御相談いたしま
せんでした。今後ともよろしくお
願ひ致します。
(隆昌)

三本の杉

山崎慎子

八月末の嵐の日に、裏庭の三本の杉が倒れてしまいました。「人の音せぬ暁」に、誰にみとられることもなく、雨と風の協奏曲の中で三本の杉は倒れたのでした。その杉は、父が幼い時にその父親によって植えられ、そして父と共に育ってきたものでした。父はその杉は勿論のこと、庭の木々、草、花、苔、そこに在る全てをこよなく愛し続けました。病を得て不自由な身体になってからも父は家人の気付かぬ夜明けにそっと起き出して、庭の木々や小鳥たちと言葉をかけ、一人でうなずきながら散歩をし、庭の全ての生きとし生ける物たちを、いつくしみ続けたのです。

雑草がこんでくると父は、スポーツウェアに野球帽、軍手、ズツクのいでたちで、地べたにどっしり腰を下して、丹念に雑草をとりました。時折、ひとりごとをつぶやきながらコッコツとコッコツと。それは決して上手な草とりではあ

りませんでしたし、はかどるやり方でもありませんでした。十日経てば十日分、庭の雑草は確実にその姿を消してゆきました。その草とりは、不器用ではあるが、いねいな、地味ではあるが、暖か味のある、父の生き方、そのものようでもありました。

二年前の春、やはり大風の吹いた日に、この時は前庭の杉が十本余倒れてしまったことがありました。この時既に、父は声を失なっており、多きは語ることはありませんでした。深く悲しみ、倒れた杉たちをいとしんで、よく読みとることができました。

そしてこの夏の終りに、折からの嵐と雨のために三本の杉が倒れてしまったのは、父が亡くなってから、ちょうど三ヶ月経った八月二十三日のことでした。最期の六ヶ月を、床の中で過さなければならなかった父の病床から、ちようどよく見通せる場所に、その三本の杉は立っていたのです。

後記

「大地」八号をお届けします。ずい分遅れてしまいました。お盆の発行の予定が、もう九月も下旬です。頸城野の稲刈もそろそろ終りとなる頃です。

五月、前任職の父の他界にあたり、皆様に本当にお世話になりました。あれからもう四ヶ月経ちましたが、まだ実感として受け取ることが出来ず、何かもやもやとしておるような状態です。

今年正月、父の病状は最悪となり、癌に全身が蝕ばまれ、ボロボロとなった身体を病床に横たえながら「命噴く季待つ櫛」雪晴る」とよみ、最後の最後まで生きぬく姿勢を持ち続けたことに頭が下がります。同時にそうできたのも皆様方からの暖かな励ましと御援助があったからと思います。実際どれほど多くの人々から、どんなに助けられたか判りません。今号はその御礼の気持を込めて特集をくみました。有難うございました。(隆昌記)